〔連載講座…六〕

暖地に向く飼料作物の栽培と草地改良法

九州大学助教授・農学博士
江原　薫

コンモン・ベッチ（ザートウィッケン）

わが国によく自生している、ホソバノカラスノエンドウから発達した、越年生の冬作マメ科牧草である。暖地では至るところに冬作としてよく成功し、青刈エンバクとの混播に広く用いられている。寒さに対しては、ヘヤリー・ベッチよりも弱く、寒地では春蒔である。

あらゆる型の土によく繁茂し、乾田にも栽培される。

肥料として反当過石五～八貫、硫酸カリ三貫内外を施す。

新鮮種子が好ましく、発芽力は三年間はよく保たれるが、その後は急に減ずる。硬実もある。コンモン・ベッチはわが国では主として暖地で栽培されるので秋蒔が普通で、九～一一月頃までに蒔く。水田裏作も出来ぬことはない。

わが国では一・五尺位の畦幅に条播することが多い。単播のときの播種量は反当三～六升位。桑園及び茶園間作として栽培されるが、反当約三升位蒔く。

エンバク、ライ麦、大麦及び小麦などがベッチの支柱作物として混播に用いられる。エンバクが特に勝れているのは、青刈エンバクの品質がよく、採種のとき両者の種子を互いに分け易いからである。この場合反当コンモン・ベッチ三～四升、エンバク四～五升が混ぜられる。

開花期が生草との刈取適期で、乾草用には満花期から最初の莢が形成する頃までである。二番刈も出来ぬことはないが、多くは有利でない。

桑園、茶園等の間作では反当生草収量は三〇〇～六〇〇貫、畑では四〇〇～一、〇〇〇貫位、乾草収量は八〇～一五〇貫位。

利用法は主として生草である。

採種は容易でないが、ヘヤリー・ベッチのようには困難ではない。

コンモン・ベッチ

カウピー（ササゲ）

カウピーはアメリカ南部の州では有名な飼料作物であるが、近頃はわが国でも暖地、特に夏のヒデリの甚しいところでは注目されている。

現在九州農試では多数のカウピーの品種の試験を行っている。

播種期は四月下旬から五～六月頃、特に暖地では七～八月播くこともある。それで早期水稲跡作としても注目されている。

播種量は反当二・五～三升位。普通条播で畦幅二・三～二・五尺、外国では撒播もする。株間二～三寸。

トウモロコシ、ソルゴー、スーダン・グラッス等と混播することもある。

莢の大部分が十分発育し、最初の莢が成熟したときに刈取る。反当生草収量三〇〇～八〇〇貫。青刈、サイレージ、乾草及び放牧に用いられる。生草は家畜によつては慣らさねばならぬこともある。

カウピー

黄花ルーピン

黄花ルーピンの中、無毒のものが飼料用に栽培される。これを甘ルーピン或は無毒ルーピンという。

黄花ルーピンは軽い砂土及び砂質壌土に極めてよく適している。埴土には青花ルーピンがよい。

黄花ルーピンは北海道では春蒔として、暖地で

は秋蒔としてよく繁茂する。

ルーピンは新墾地では連作がよい。これは根瘤菌の接種が新しい土地では不十分であるからである。根瘤菌の接種は極めて有効であるから必ず実行するがよい。

ルーピンは酸性土壌に極めて強い作物で石灰を施さぬ方がよい。

反当堆肥一〇〇貫、過石五〜六貫、硫酸カリ一貫位を施す。

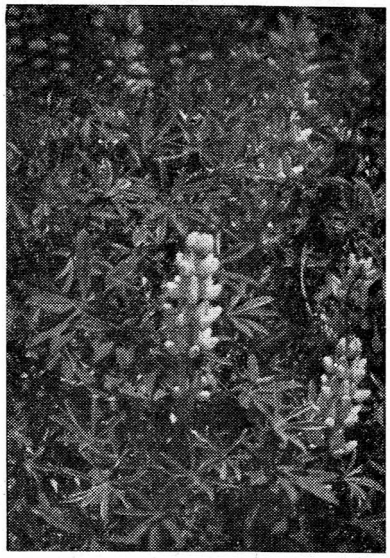
暖地では九月下旬〜一〇月下旬頃に蒔く。主作物として蒔くときは、反当四〜五升間作としては二〜四升位が播種量である。

畦幅二〜三尺、株間五〜六寸、採種用には株間一〜一・五尺位とする。

刈取期は開花盛期である。

生草収量は果樹園間作で四〇〇〜五〇〇貫、麦間作では一〇〇〜二〇〇貫。単作ではよい方は反当八〇〇〜一、〇〇〇貫位である。

無毒ルーピンといっても、家畜に慣らす必要がある。



黄花ルーピン

ヤハズソウ（ジャパン・クロバー）及びメドハギ

最近アメリカ南部の州ではレスペデーザといって、多くのハギ類が牧草として栽培されており、わが国でも暖地に有望と見られている。

これ等のハギ類の中で重要なものは、一年生ではヤハズソウ、マルバヤハズソウ、永年生のものではメドハギが最も有望と思われる。

ヤハズソウとマルバヤハズソウは類似した性状を示しているが、後者の方が葉の形がヤハズソウよりも少しく丸く、茎はより硬い。

これら牧草は暖地に適するもので、あらゆる土壌に生育する。特に酸性土壌に対して強く、暖地では新しく草地を造成する場合には極めてよい。収量は必ずしも多くはないが、開墾した直後に草地に蒔き、これを刈取らずに鋤き込むようにすればよいであろう。

これら牧草の品種として日本に入っているものは次の通りである。

ヤハズソウ……コーベ、テネシー七六

マルバヤハズソウ……ハルビン、レート・コーリアン、アーリー・コーリアン、クライマックス

肥料としては燐酸がよく、堆肥を与えると一層生育がよい。

寒さに弱いので春先霜のおそれがなくなってから、莢のついたままの種子を蒔く。古い種子（二年種子）は発芽力が著しく劣る。

わが国では条播も行われるが、撒播が普通である。撒播の場合、乾草用には反当四〜七听、放牧地では一度蒔いてあとは自然に繁殖されることもある。

莢に根瘤菌が附いているので、ヤハズソウには根瘤接種の必要はないが、始めての土地には、ヤハズソウの繁茂している土をとり、種子一听に土一听を混ずるとよい。

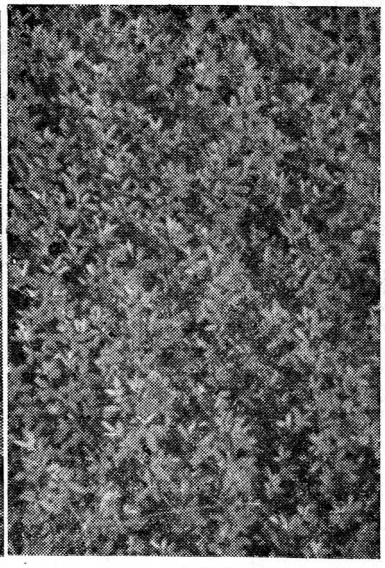
反当生草収量は三〇〇〜七〇〇貫、開拓地でも四〇〇〜五〇〇貫の収量をあげることがある。

放牧草として良好なもので家畜に好まれ、乾草としても品質はよい。

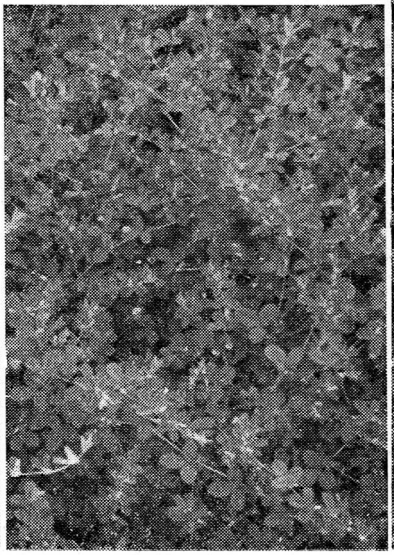
メドハギは乾草にも用いられるが土壌保護によく用いられる。

クズ

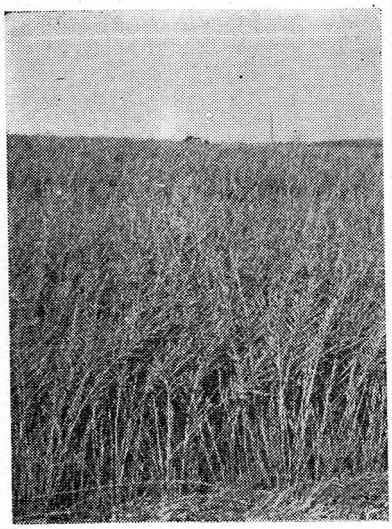
クズは今から約八〇年前に



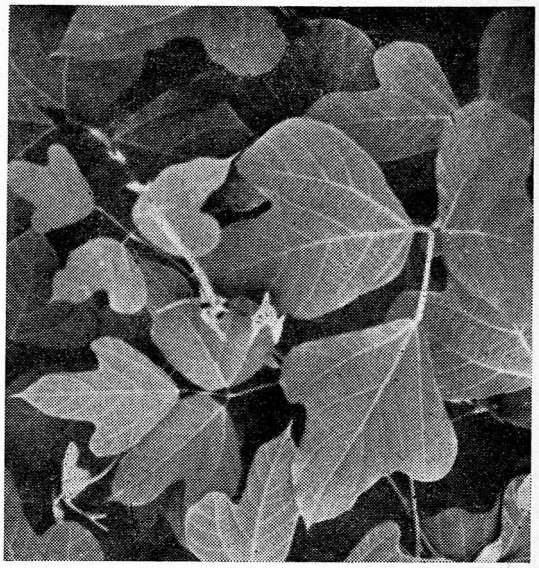
ヤハズソウ



マルバヤハズソウ



メドハギ



クズ

アメリカのフィラデルフィア百年祭博覧会に日本から始めて入れられたものである。今日では飼料作物及び土壌保護作物として利用される。

クズはわが国では北海道から九州まで自生しているが、暖地の方に野生が多い。気温が高く、また雨が多いことがクズの繁茂によい条件である。

殆どあらゆる土壌に生育する。石灰岩地帯に極めてよく生育するが、酸性土壌にもよく繁茂する。

クズの種子には硬実が多く、種子の表面に傷つけるがよい。

繁殖法は次の通りである。

(イ) クズの蔓の節が土に接しているところから根を生ずるが、これを堀りとつて苗にする。

(ロ) 苗床で実生から苗を仕立てる。

(ハ) 直接に種子を蒔く方法。これは種子を多く要し、管理に著しく労力を要するのでよい方法とはいえない。

(ニ) 蔓の一部を挿木する方法。

植付時は二〜三月頃から梅雨頃まで。

畦幅一〇〜三〇尺

株間四〜一〇尺。

植付初年目には刈取らず、二年目に一回刈取る。三年目位からでも年二回刈り、刈過ぎると株が弱る。

クズは乾草、生草、サイレージとして利用される。乾草は反当一〇〇〜一五〇貫位である。

野生のクズは暖地には前述のように極めて多いが、わが国の農家はあまり採取しない。採集する労力が極めて大きいからである。

飼料用カブ

カブは暖地に適する飼料用根菜類の一つである。

飼料用として知られているカブの品種には次の二種類がある。

紫丸カブ‖地上部は紫色をしているが、地下部は白く、肉色も白である。本品種は次のセブントップよりも早生であつて、晩秋から初冬にかけて利用するによい。

セブントップ‖本品種は別名が多く、下総カブ、或は小岩井カブ等ともいわれている。根部の露出部は緑色であるが、肉色は白である。本品種は収量が極めて多い。紫丸カブよりも晩生で、紫丸カブの収穫後に利用するによい。

飼料用カブ（セブントップ）

暖地では多く晩夏から初秋にかけて蒔く。

早期水稲の裏作にも用いられる。

畦幅一・五尺から二尺。反当播種量は三〜五合。本葉二〜四枚の頃から間引して一本立とする。株間は六〜七寸、或は一尺。

暖地では根部が肥大した後に適宜抜取つて家畜に与える。収穫適期は葉がしおれ始め、黄色になる頃である。

反当収量は七〇〇〜一、五〇〇貫。多いときは三、〇〇〇貫に達することもある。

ルタバガ（スエーデン・カブ）

ルタバガはナタネから生じたもので、元来北ヨーロッパ、日本では北海道に適する根菜類であるが、暖地でも冬作として有望である。乾燥には弱い。

大抵の土壌によく生育し、水田裏作も出来る。

品種は多く、日本でも多数の品種が試験されたが、北海道から九州まで次の二品種がよい。

ホワイト・フレッシュド・ネックレス

マゼスチック

ルタバガ
（ホワイト・フレッシュド・ネックレス）